

八反遺跡発掘調査説明資料

財団法人山形県埋蔵文化財センター 平成 23 年 10 月 15 日

調査要項

遺跡名(番号)	八反遺跡(県番号No.723)
所在地	山形県東根市大字長湍字八反
時代・種別	古墳時代～平安時代・集落跡 中世・墓地跡
起因事業	東北中央道(東根～尾花沢間)
調査依頼者	国土交通省山形河川国道事務所
調査機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
現地調査	平成 23 年 5 月 10 日から 11 月 30 日まで
調査面積	7,000㎡
調査担当者	主任調査研究員 高桑登(現場責任者) 調査研究員 小野健二 長谷部寛 調査員 高木茜 高柳俊輔 板橋龍
調査成果(10月15日現在)	
検出遺構	古墳時代:土坑 奈良・平安時代:竪穴住居跡 土坑 河川跡 中世:火葬遺構 土坑 柱穴 溝跡 河川跡
出土遺物	古墳時代:土師器 須恵器 奈良・平安時代:土師器 須恵器 中世:青磁 古瀬戸 古銭 人骨



図1 遺跡位置図(1/50,000)



写真1 調査前状況(南から)

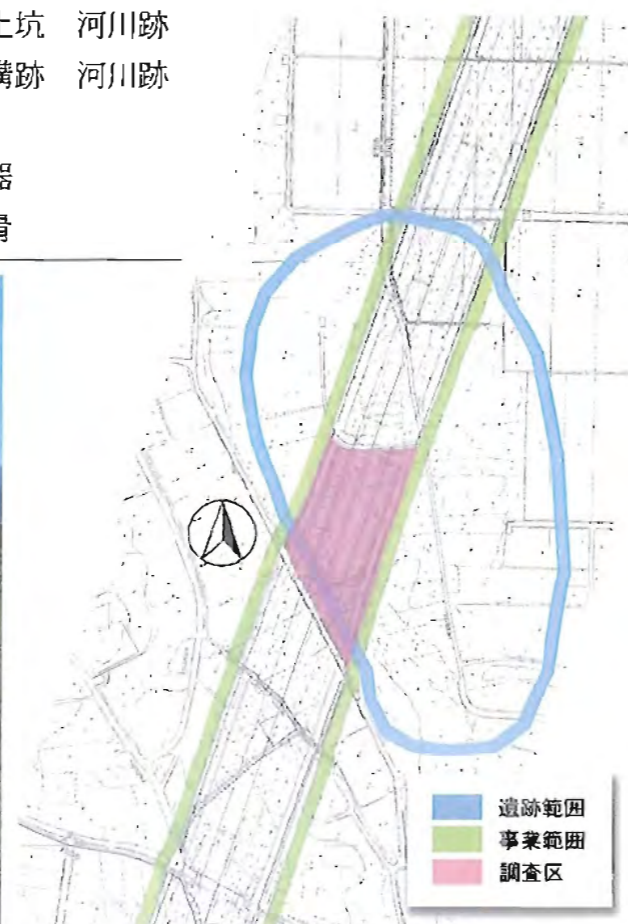


図2 調査区概要図(1/5,000)

1 調査の概要

八反遺跡は最上川右岸の自然堤防上に位置しています。現在は果樹園や畑が広がり、周辺の水田より一段高くなっています。

遺跡から約 800 m 南には、最上川の旧河道によって大半が削られた方形居館である長湍本橋があり、一帯は最上川の氾濫原だったことがわかります。

地元の方の話によると、最近まで大雨が降ると遺跡のすぐ近くまで最上川の水が上がっていたそうです。また、遺跡の周辺には 8 つの壇があったとされ、「八反」の地名の由来となっています。

2 見つかった遺構と遺物

調査の結果、火葬遺構や集石遺構など葬送に関連する遺構が数多く見つかっています。

火葬遺構は、幅 40～60cm、長さ 100～120cm 程の長方形で、長辺の両側に溝が直交しています。壁面が火を受け赤く焼けており、底面には炭が堆積していました。炭の上から火葬された人骨が出土しています。

SK0587 火葬遺構(写真 2・3)からは、火葬された時の姿勢がわかるほど人骨がまとまって出土しています。頭を北にして足を折り曲げ、西側を向いて火葬されたことがわかりました。

集石遺構は調査区の北東部で多く見つかっています。土坑や溝など様々な形の遺構に数センチ大の石が集められています。

SK0599 集石遺構(写真 7)は長軸 2.8m、短軸 1.8 m の不定形の範囲に石が集められています。ここから古銭が 6 枚まとまって出土しました。死者に供えた六道銭と考えられます。

その他の集石遺構からは、古瀬戸(写真 8)や青磁等、15 世紀頃の遺物が出土しており、

中世後半にこの一帯が葬送の場であったことがわかりました。

調査区の南部からは河川跡が見つかっています。土の堆積の様子から 4 時期の変遷が確認できました。縄文時代から近世の遺物が出土しています。

中世の墓地が見つかった遺構面を 20～30cm 掘り下げると、古墳時代から奈良平安時代の遺構が見えてきます(写真 5・9)。竪穴住居跡や溝跡等が見つかっており、この地が墓地になる数百年前には、集落であったことが分かってきました。

3 まとめ

今回の調査によって、八反遺跡は中世の墓地であったことがわかりました。遺跡の南側にある居館の長湍本橋を中心とし、北側に屋敷地(沼袋遺跡)と墓地(八反遺跡)が広がる中世の景観が見えてきました。また、中世の墓地の下層には、さらに古い時代の集落が埋まっていることがわかりました。



写真2 SK0587火葬遺構(上が北)



写真3 SK0587 火葬遺構 (北東から)



写真4 SK0059 火葬遺構 (東から)



写真5 下層遺構検出状況 (西から)

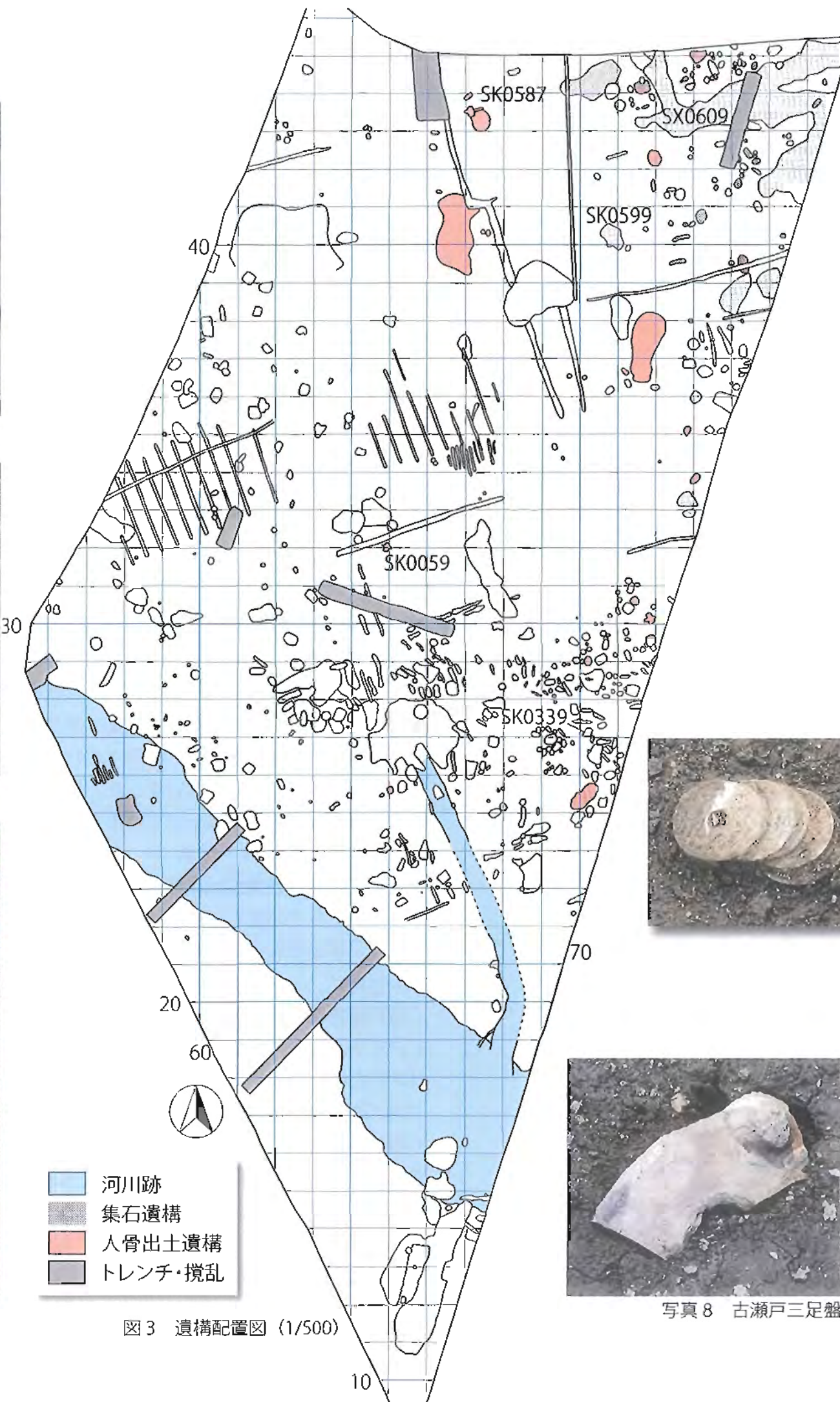


図3 遺構配置図 (1/500)



写真6 SX0609 集石遺構 (西から)

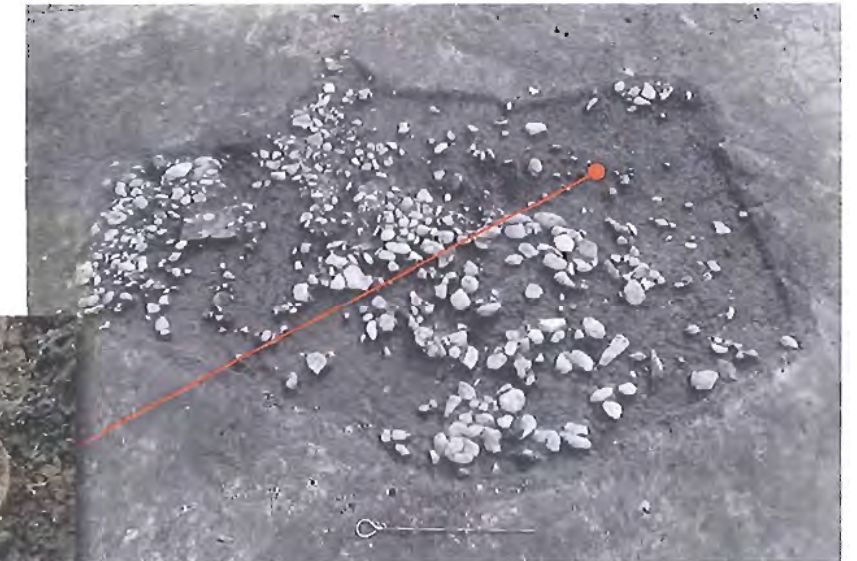


写真7 SK0599 集石遺構と六道銭 (東から)



写真8 古瀬戸三足盤



写真9 SK0399 土坑 (東から)